

月刊 ダム日本

- 第22回写真コンテスト入賞作品
- 工事状況写真7
- [事業紹介]
山鳥坂ダム建設事業について
- [アニバーサリーイベント特集]
胆沢ダム周辺エリアを活かした地域活性化を目指して
～胆沢ダム完成10周年記念の取り組み～
- [レポート]
黒部ダムと交通
- [ダムマイスターレポート]
安房地域 農業ダム・ため池見学会レポート
広田堰～安房中央ダム～金山ダム
- [ダムをとりまく人物周航10]
沢田敏男先生の世界 ー理性と感性の融合ー
- [お知らせ] ダムマイスター募集中
- 第8期ダムマイスター紹介
- [ダム工事総括管理技術者会活動情報]
2月度ダム工事総括管理技術者会意見交換会の報告
- 日本ダム協会活動情報
- 一般財団法人 日本ダム協会 会員名簿



No.966 4

2025



日本ダム協会写真コンテスト最優秀賞・天端までどどけ！（横瀬川ダム）

沢田敏男先生の世界

－理性と感性の融合－

はら とし あき
原 稔 明

特別上級土木技術者（土木学会）
（元）いであ（株） アドバイザー

はじめに

農工学者である沢田敏男先生は、京都帝国大学農学部農林工学科を卒業、同大学農学部長などを歴任され、昭和54（1979）年から60年まで第20代京都大学総長を務められた。

また、多年にわたり農業工学の研究と教育に携わり、ダムの水利施設の設計上の基本的問題に取り組み、多くの有用な設計法を確立するなどわが国を代表するダム技術者としてすぐれた業績を上げられ、2005（平成17）年に文化勲章を受章しておられる。

本稿では、最初に筆者がダム技術者を志して10年余経過した頃に『大ダム』1994. 6にて、技術者として心を深く揺さぶられた巻頭言「美しいダムと水環境づくり－理性と感性の融合－」を紹介する。

続いて、先生がこれまでに係わられたダム数は220におよぶとのことであるが、そのほんの一部分を「文化勲章を受章して」と題しての沢田先生自らの講演会他から、先生のご功績のダム技術等について抜粋し記述した。

最後に、昭和天皇と平成天皇との接点を通して先生のお人柄についても紹介したものである。

1. 沢田敏男先生とは－先生の略歴－

農業土木・ダム工学を専攻された農工学者である沢田先生（1919～2017）は、現在の三重県

伊賀市（旧青山町妙楽）の出身で、現在の名張高等学校（名張農業学校）を経て、京都帝国大学農学部農林工学科を卒業、同大学農学博士を修了された後、昭和34年同大学農学部教授に就任、農学部長などを歴任され、昭和54年から60年まで京都大学総長を務められた。

多年にわたり、農業工学の研究と教育に携わり、ダムの水利施設の設計上の基本的問題に取り組み、多くの有用な設計法を確立するなど、すぐれた業績を上げる。

2005（平成17）年に文化勲章受章したほか、農業土木学会学術賞、日本学士院賞、勲一等瑞宝章、文化功労賞など数多くの輝かしい賞を受賞。第20代京都大学総長のほか、国立大学協会会長日本学術振興会会長、大学設置審議会会長、国際高等研究所所長などを歴任している。享年98歳で逝去。



写真－1 沢田敏男先生³⁾

2. ダムと水環境づくり －理性と感性の融合－

サイエンス アンド アート

近代文明は、人びとに賢くなることだけを強要し、知性や理性だけで自然をそして感情さえも征服できると考えさせ、また科学技術の発展は、さまざまなハイテク機器を生み出して実用

面で多大の成果をあげながらも、他方人間の全体的な生き方、とりわけ感性面での自己実現を阻むものとなってきた。理性主義が世の中の判断基準となり、感性的なものや感覚・感情と関係のあるものは、理性より劣ったもの、あるいは理性とは関係のないものとしてさえ取り扱われるようになった。人間の生み出すものは、一方では厳密科学の規矩に準じた機能主義の権化と、他方では喜怒哀楽の情念を表現した芸術作品とに分かれてしまった。機能美というのを言い出したのは、結局はこの理性主義の破綻を繕うために、もっと感性的なものを、人間のなかにも環境にも、大切にしなければいけないという反省の現れであろう。

そこで、新しい世紀においては、科学技術面の取り組みだけでなく、もっと芸術等の感性的なものを重視し振興しなければならないと考える。いわゆるサイエンス アンド アートの時代をつくることが要請されるであろう。

快適な親水性空間

われわれ水利構造物の計画設計に携わる科学技術者としても、貯水、取水、導水、分水などといった水利施設としての本来具備すべき機能のほかに、景観上も人びとに心地よい感動を与えることのできるような本当に美しい構造物、つまり理性と感性を融合させたような文化的工作物を創造するよう心掛けることが極めて大切なことである。このようなことが、今後強く要請されてくることであろう。また、人びとが潤いのある真に豊かな生活を実現するための環境づくりに、きれいな水や美しい流れのあることが欠かせないことと思う。文明が進むにつれて、このような水の存在が益々重要になっている。そこで、貯水ダムや溜池、頭首工等の建設でできる水面や岸辺を工夫活用して、親水公園やキャンプ場などを創設し、快適な親水性の空間をつくりだすことが要望されるのである。なお、このようなダムの景観設計や親水空間づくりのための予算が、国の公共事業においても計上できるようになってきたことは評価される。

感性に裏打ちされた理性

ところで、本当の“美しさ”という、その語

のもともとの意味は、「親が子を、また夫婦が互いに、かわいく思い、情愛を注ぐ心持ちを言う」のである。すなわち、情愛を注ぐ心持ちを人間に生じさせるようなものでなければならない。自然と愛着を覚えるような美しさである。それは自然環境とも調和するものとなろう。言い換えれば、物にそれ自体の客観的な美が宿るだけではなく、見る者、使う者に心地よい感動、居心地良さ、心なごむ温かさを与えるものでなければならない。物と人間が共鳴し、ふれ合うことが要求されるのである。感性に裏打ちされた理性、人の心に訴えるゆるぎやあそびを物や工作物に備えさせる努力が今ほど必要とされる時代はないと考える。人間の感性に訴えるもの、人間への優しさを宿していなければ本当の美しさにはならないと言えよう。作る側が理性と感性とを共に活性化させて、両者が作品の中で融合された形で表現する、それしか本当の美しさを感じさせることはできない。物や工作物と共に「生きる」ということであろう。これこそ美の哲学と申すべきではなかろうか。

取水ダム “一の井ぜき”

さて、景観に工夫を施した取水ダム—頭首工として、京都市嵐山の“一の井ぜき”が挙げられる。渡月橋のすぐ上流に設けられた低い堤高のせきである。ここで取水された水は、洛西用水（数百年の歴史をもつ古い用水である）と呼ばれ桂から向日町を経て長岡京に至る、いわゆる乙訓平野をかんがいする用水で、その一部は桂離宮にも注がれている。せきの所管は京都市で、これが1950年頃改修されることになり、そのせきの構造や修景について検討された。嵐山はよく知られる山水の景勝地であり、また昔から春秋には竜頭の舟を浮かべて王朝絵巻を再現するところで、せき上げてプールされた水面というのは重要な意味をもっている。そこで改修するせきの基本構造は、コンクリートグラビディタイプとするが、なるべく自然岩盤に模するよう工夫することとし、堤体コンクリートの表面に堅硬な黒色の自然石を逆張りすることにした。またせき下流のウォータークッション部や沈床等の工法も工夫して慎重に施工された。

このようにして改修された一の井ぜきは、自然景観によくマッチした取水ダムとして機能し今日に至っている。

美しい頭首工と複合ダム

私の脳裏に残る美しい頭首工として、ドイツハイデルベルグのネッカ河に造られた頭首工がある。ハイデルベルグの古城と共にその景観は素晴らしい。また、1963年に完成した木曽川の犬山頭首工は、格別修景に配慮し、創意工夫されており、国宝の犬山城や伊木山を水面に映した景色は、恰も“一幅の絵の如し”と観賞され、広く親しまれている。

つぎに、貯水ダムの景観設計として特筆すべきは、フランスのローズランダム(1961年完成、堤長806m、堤体積94万 m^3 、貯水量18,700万 m^3 、洪水流量90 m^3/sec 、A・コイン博士の設計)であろう。このダムは、谷の中央部に高さ150mのアーチ部を設け、その両側にバットレスタイプの堤体を配置した複合ダムで、実に美しい。今から32年ほど前、このアーチとバットレスのコンビジットダムを訪れ、その実景を眼前にしたときの感動を今も忘れることはできない。またこの近くの地下発電所を見て感心したことは、発電所のホールに素晴らしい壁画が飾られていたことである。当時ドゴール政権のもと、アンドレ・マンロー文化相らは、芸術、美術を振興することによって、フランス国民の精神を作興するのだということで、ダムや発電所建設のような公共事業においても、施設の修景や環境整備のために投資する施策が行われていることを聴き、感銘を受けたことを思い出す。近時我が国においても、この種ダムの景観設計や水環境等の整備に積極的に取り組むようになってきたことは、よろこばしいことである。

私の愛誦する歌

おわりに、私の愛誦する歌を掲げて、この拙文のむすびとしたい。歌の作者は不詳であるが、その昔、京都嵯峨の広沢の池畔で詠まれた尊い方の御歌と思う。

うつるとも 月もおもはず うつすとも

水もおもはぬ 広沢の池

無心の秘訣を洞徹する歌であるが、この無心

の境地に誘ってくれるのも、美しい水を湛えた広沢の池であり、すぐれた水環境である。

以上、美しいダムと水環境づくりについて管見を述べたが、要は人びとの心に、うるおいや豊かな感性を与えることのできるような水利構造物を創造すること、つまり計画設計に携わる者として、理性と感性とを共に活性化させて、それらが作品の中で融合された形で表現できることをもっと工夫してほしい。さらにこのことは、研究面でも積極的に取り組むべきことであろう。

日本学術振興会会長（京都大学名誉教授）

『大ダム』1994.6より

3. 科学技術と芸術の融合

平成18(2006)年9月に「美しい日本の国土の復権を一国土づくりと人づくり」と題した風土工学10周年記念シンポジウム(風土工学デザイン研究所主催)が開催された。

その中で、パネリストの一人の沢田敏男先生は「科学技術と芸術の融合」と題して、「科学技術的な理性と芸術的な感性との融合による、新しい文化の創造ということが、より一層重視されてくる」と述べ、ダムや水路のような水利構造物にも、本来具備すべき機能の他に、景観上からも人びとに感動を与えられるような構造物をつくることが望ましいと主張された。

以下に、その内容を抜粋して紹介する。

3.1 フランスのローズランダムについて

(2.の後半部と一部重複するところがあるがご容赦願いたい)

私の脳裏に残る美しいダムとして写真-2に示すようなフランスのローズランダムというのがあります。これは、アルプスの大自然に調和した、アーチとバットレスの複合ダムです。川はローヌ河の上流イゼール川という



写真-2
ローズランダム³⁾

支流に1961年に造られました。

ローズランダムは、アーチ部が150mあり、その両岸にバットレスダムがついています。全長が約800m、貯水量が1億8700万トンでフランスでは中規模の発電が主になっています。

バットレスとアーチ形式にしたことによって、コンクリートボリュームが重力式ダムの6割ぐらいで出来ています。アンドレ・コイン博士という国宝的な人が設計されたダムです。

経済的、技術的に優れていると同時に、景観が優れています。

近くの発電所を見たのですが、地下発電所に壁画が作られていました。その当時、アンドレ・マンロウという文化相がおられて、ドゴール大統領のもとで、マンロウ文化相はダムとか発電所、そういう公共事業におきまして工事費の約1%程度の費用をかけて「修景をなささい、景観設計に工夫をなささい」ということを指導されていたのです。

当時、私は大変感銘を受けました。それから一層私は、景観設計ということに留意するようになりました。

(写真-3、4はローズランダムのストックフォトから引用した)



写真-3 ローズランダム (筆者提供①)

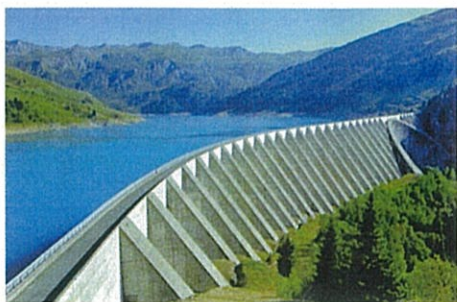


写真-4 ローズランダム (筆者提供②)

3.2 琵琶湖疏水と哲学の道

明治23(1890)年に琵琶湖疏水が開削されました。これは京都から東京への遷都に際して、京都の復興を図るための画期的なその当時の水利プロジェクトであります。当時の東京大学土木工学科を卒業して論文を書いたのが田邊朔郎先生です。

当時は大阪府、滋賀県等々からも反対がありまた南禅寺の水路閣をつくるのはけしからんということで



写真-5 琵琶湖疏水³⁾

福沢諭吉先生も反対されております。

いま公共事業云々等々の問題がありますが一つのナショナルプロジェクトをやる場合にも、先見性をもって、なぜ、どうして必要なのかということで妥当だと考えた場合に、信念をもってやる、そういう技術者、行政官、政治家の理念・哲学が必要であることを痛感します。

また、東山山麓を流れる疏水に沿って哲学の道が誕生しました。これはハイデルベルグのネッカ川河畔にある哲学の道を模して愛唱されるようになったと聞きますが、かつて西田幾多郎先生や田邊元先生等の先覚や学徒が逍遙した道であります。



写真-6 哲学の道³⁾

この哲学の道が生まれたのも、静寂で美しい疏水の流れがあったからでありましょう。ということで、水利施設の建設によってできる水面や岸辺を工夫して、快適な親水空間を創造することがますます要望されるのであります。

(以下は、筆者の加筆文章)

哲学の道の横を流れる疎水は、正確には琵琶湖疏水分線と言い、蹴上で琵琶湖疏水からの分

岐した水路で、琵琶湖第一疏水と同時期の明治20年頃に開削された。沿線各地への水力利用や灌漑用水や防火用水の供給が主たる目的とされていた。

しかし、現在では疏水分線沿いのほとんどの地域は宅地化されてしまったため、疏水分線の利用はかなり限定的なものになっているが、疏水分線の施設である南禅寺水路閣や疏水分線沿いの哲学の道などが観光名所として認識されるようになったため、疏水分線は存在意義を失うことなく現在も地域住民に親しまれている。

1987（昭和62）年に「日本の道100選」に選定されている哲学の道は、若王子橋から浄土寺橋まで続く疏水沿いの全長約2 kmの散策道には春には約400本のソメイヨシノなどが咲き誇る。

ところで、京都は北高南低の盆地であるため川のほとんどは北から南に流れているが、人工的に作られたこの疏水分線は多くの区間で南から北に流れるため珍しい川（水路）とされてきたようである。

3.3 黄金比（ゴールドレイショ）について

図-1に示すような黄金比（ゴールドレイショ）を犬山頭首工において重視して寸法を決めました。あまり頭でっかちものにしますと、景観上からいっても不具合です。スマートに作るということは、あくまで科学技術的な許容範囲でありまして、図-1に示すピアであります。

ゴールドレイショは、名画、モナ・リザや名面の面長を見ますと、よく合っているのです。十一面観音のお顔もこのような寸法比になっている。科学的な根拠はありませんが、こういう形状によって、見たところ非常に安定感があり、美しいと感じるのです。

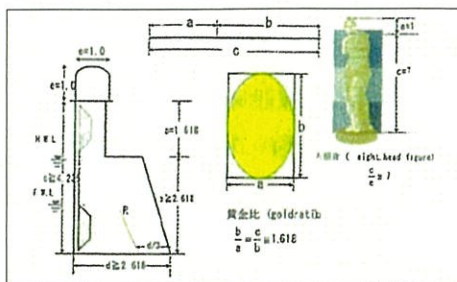


図-1 黄金比（ゴールドレイショ）

3.4 香川県の豊稔池ダム

写真-7は、香川県の豊稔池のマルチプルアーチダムで、1930年ぐらいにできています。今でも美しく機能しております。

本シンポジウムでは、他にも犬山頭首工、広沢の池さらに永源寺ダム、児島湾の淡水化事業を紹介されていたが、第2章他での内容と重なるため本項では割愛する。



写真-7 香川県の豊稔池ダム

4. 沢田敏男先生と川上ダム

4.1 川上ダムの概要

川上ダムは、ダムサイトの左右岸が三重県伊賀市青山と伊賀市阿保に位置し、淀川水系木津川に、水資源機構が1982（昭和57）年に着工し2023（令和5）年3月に竣工した重力式コンクリートダムである。集水面積54.7km²、高さ84.0 m、堤頂長334 m、堤体積45万5千m³の総貯水容量は3千1百万m³、有効貯水容量2千9.2百万m³の洪水調節と伊賀市水道用水の供給等の多目的ダムである。川上ダムは他ダムにない目的として、「既設ダムの堆砂除去のための代替補給」という新規目的を有している。

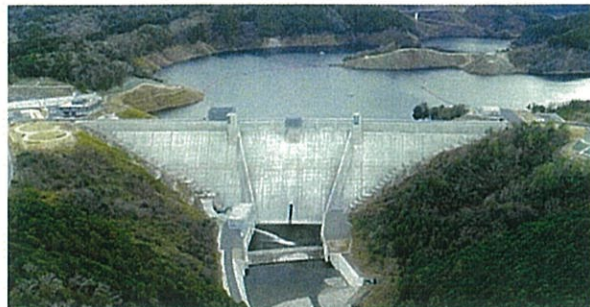


写真-8 川上ダムと貯水池（川上ダム HP）

堆砂除去のための代替補給とは、木津川水系内に建設された竣工後50年以上経過した高山ダム他が水位を低下して堆砂除去を行う際に、水位低下に伴う利水容量の補給を川上ダムが代替して行うというものである。

なお、川上ダム貯水池は、2025年3月現在試験湛水中である。

4.2 沢田先生の川上ダムへの助言

沢田敏男先生は、川上ダムが建設される現在の伊賀市青山町のお生まれでもあり、早くから故郷に建設される川上ダムへの思いが強く、ことあるごとに川上ダムの進捗を気遣われる中で以下のような助言をされている。

- ・何ごとにも地道な調査、しっかりした調査が一番大切である。
- ・川上ダムの取り組みとして、オオサンショウウオの保護などの環境活動を通して子供たちに教育の場を提供する姿勢には賛同する。
- ・地元の地域振興の一環としてのダム周辺環境整備に期待している。
- ・郷土愛を大切に育む観点から、地元で現代科学技術の粋を尽くした川上ダム建設という大きな事業が展開されることを誇りに思う。この気持ちを地域の皆さん方に醸成して欲しい。

5. 沢田敏男先生と文化勲章

沢田敏男先生が、2005（平成17）年11月に文化勲章受章されたことを祝う「沢田敏男先生文化勲章受章記念講演会」が、猪上・旧青山町長が実行委員長、伊賀市長、名張市長が実行委員を務める実行委員会の下で、2006（平成18）年2月4日に伊賀市において行われた。

「文化勲章を受章して」と題しての沢田先生自らの講演会から文化勲章の概要と先生のご功績のあらまし等について筆者の独断で抜粋して以下に紹介する。

5.1 文化勲章とは

文化勲章令は、昭和12年の2月11日に制定されており、「文化勲章は、文化の発達に関し、勲績卓絶のある者にこれを賜う」とあります。

第1回は、三重県のご出身の和歌のヒストリー草分けの佐佐木信綱先生、物理学の長岡半太郎先生、本多光太郎先生、文学方面では幸田露伴、絵画では横山大観などがいる。

第2回は、西田哲学の創始者である西田幾多郎先生が、第3回目には湯川秀樹先生、今回私は第67回で5名の方が受賞しております。

その5名がどうして選ばれるかは、文化功労者選考審査会というのがあり10名の委員でもって審査いたします。文化功労者が毎年15名ずつの中、生存者の中から毎年おおむね5名が選ばれます。さらに、ノーベル賞が決まると、1名でも2名でも当然文化勲章に相当する人だというのでプラスされるしきりになっています。

5.2 文化勲章受賞は郷土のお陰

本日は、文化勲章受章に際し「はぐくまれた郷土に感謝」と題して話をさせていただきます。まず父母、兄弟姉妹に感謝をする。小学校、農学校等に感謝をする。また広く社会環境、あるいはこの恵まれた我が郷土の自然環境に感謝をする。このようなおかげで今日があると考えます。特に、母が常に栄養的に食べ物にも注意をしてくれておりましたことに感謝します。

事に触れて特に感謝するのは、私が農学校から三重の高等農林学校、高等学校、あるいは大学生時代に母が申しましたことは、「世の中に役に立つ人間になりなさい」、「他人から愛される人間になりなさい」とよく言われました。

これが今になって思えば、非常に小さいときから心身健康に育てられた家庭環境であったとの思いにいたります。

小学校、農学校という郷土における幼少時代を過ごした母校に対しましては、その旧友、先生方、同窓生を含めまして、非常に感謝にたえないという気持ちが強いのであります。

次に、社会環境いわゆる「結い」です。田植

えをするにしても、あるいは里道の道路の普請をするにしても、「結い」の助け合いの精神が非常に濃かったと思います。立派な社会環境の郷土であったと思います。

それから次に、自然環境、これは緑豊かで川がきれいです。「うさぎおいし かのやま こぶな つりし かのかわ」、まさにこの歌に出てくるような山、川で幼少時代を数年間過ごさせてもらいました。そして心身ともに健康に育んでいただいたということで、この恵まれた郷土に感謝しております。今日あるのはまさにこの郷土のおかげであると感じる次第であります。

5.3 研究成果のあらまし

「水利施設の研究における二、三の成果～恩師並びに研究協力者に感謝～」と題してご説明します。

水利施設を完備することで災害に強い農業が展開できるということで水利施設の研究に入っていたわけですが、恩師ならびに研究協力者に非常にお世話になったことが頭から離れません。それらの成果について以下に話してみたいと思います。

① 水利施設の基礎工

a. 圧密理論の展開

b. Well point 利用の Preloading 工法の開発

ドイツ人が理論立てした圧熱理論が戦後日本に入ってきたものをいち早く勉強して、軟弱地盤上のポンプ場設計に適用しました。ウェルポイント利用で基礎地盤を十分圧密するプレローディング工法を開発し、琵琶湖の干拓排水機場に適用しました。

② 貯水ダムの設計

a. 複合ダムにおける接合部設計理論

b. フィルダムの耐震設計

次に、「複合ダムにおける接合部設計理論」について説明します。

コンクリートダムとアースフィルダムやロックフィルダムの2つの種類のダムをつなぎ合わせたダムを複合ダムというのですが、この複合ダムの理論が完成されていませんでした。

そこで、私が創始した複合ダムの理論を世界

で初めて滋賀県の永源寺ダムに適用しました。

国営の愛知川農業水利事業が、1950年頃からプランニングが始まったのですが、これは琵琶湖に注ぐ愛知川上流に永源寺という紅葉の名所があります。そこに灌漑用のダムをつくり、約2300万トン进行貯水する計画です。ここ永源寺は紅葉の名勝地でありますから、永源寺一帯の景観を損なうことのないようなダム建設にしようということで工夫しました。

私はその当時景観設計ということに心掛けていましたから、いろいろアドバイスしたのです。特に、リバーテラス（河床）の長さが150m余りと長かったのです。そこをコンクリートの重力式ダムにすると、全部オープンカットして自然景観を破壊することになりますから、図-2（平面図）、図-3（横断図）に示すようにトンネル式のカットオフを100mほど入れて、そしてカットオフとグラビティのコンクリート部の間に、堤体積4万 m^3 ぐらいのロックフィル部を設けてつなぐ複合ダムを設計しました。

ところが、ロックフィル部とコンクリートをつなぐ形状設計が非常に難しく、まだ世界で理論的にははっきりしていませんでした。そこでこの理論を勉強して、コンジョイントダムの接合部の形状設計ということで論文を、当時大学院生の辻誠一君と共著して書いたことを思い出します。その後国際的にも注目されました。大きさに申しまして、科学技術と芸術を融合させた永源寺ダムということが言えるかと思います。そして出来上がったのが、図-4に示すコンクリート接合部の形状で、3次元の曲面になっています。写真-9は、1972年に完成した永源寺ダムです。

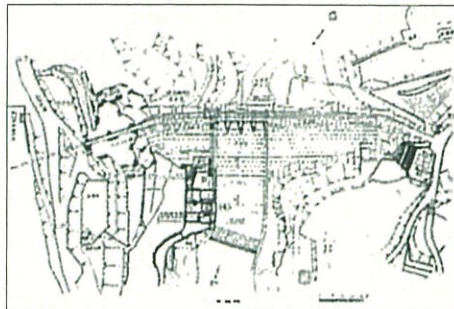
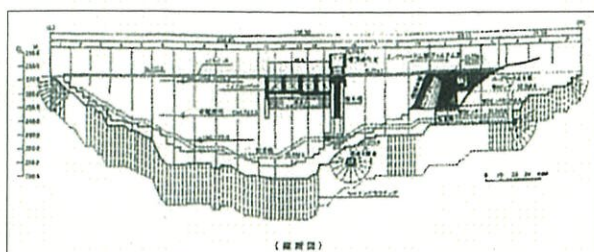
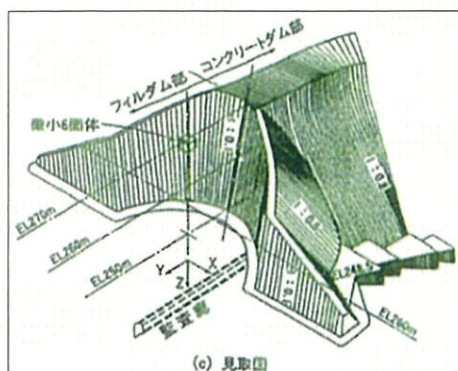
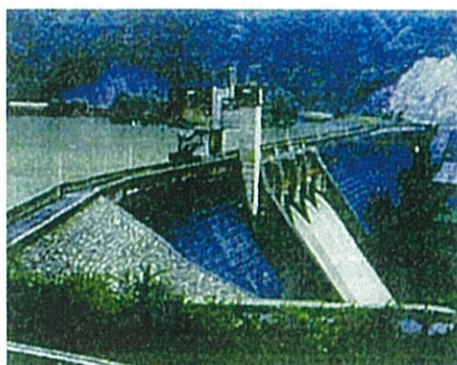


図-2 永源寺ダムの平面図³⁾

図-3 永源寺ダムの横断図³⁾図-4 コンクリート接合部の形状³⁾写真-9 複合ダム・永源寺ダム³⁾

5.4 郷土の持続的繁栄を祈る

「郷土の持続的な繁栄を祈る」ということで結びたいと思います。

そのためには、先ず「後継者の育成・確保」次に「活力ある福祉社会の建設」が大切です。

「後継者の育成・確保」については、昨今の少子化のながれの中で行政も、楽しく自信と誇りを持って子育てができるような社会環境をおつくりいただくということが必要です。自信と誇りのある子どもを育てるということはやはり愛です。愛がなければ子どもをつくり、子どもを育てることができないというのが私の細やかな経験から言えることです。

次に「活力ある福祉社会の建設」、これは田園都市構想であります。

田園都市とは、「高い生産性(農業生産性、工業生産性等)と美しい田園景観を持った農業地帯、かつ都市的利便性とか文化度を持っている、農民、市民の混住・共生している安心・安全な地域社会」と私は定義しております。

我が国のこれからの行政の一つのあり方として、「田園都市構想の形成に向けて」ということで、いろいろところで構想を申し上げております。

これからの21世紀の我が国の地方行政として、田園都市構想の形成を一つの目標に持ってほしいというのが私の考え方です。

人間は、自分がいることがだれか他人の人に役立っているという認識を持ち得て、初めて生活に張りを持てます。つまり、社会的に何か貢献を果たすことによってしか、その生きがいを感じられないというのが人間の本性であります。私は、母から「社会に役立つ人間になりなさい」ということで、教育を受けたことを特に思い出しております。

おわりに、私が日頃から愛唱しているサムエル・ウルマンの「青春の詩」を紹介します。

「青春とは、心の若さである」情熱を持つ、愛情を持つ、あるいは希望を持つという心の若さ、これが青春です。

「志を高く掲げて、希望の波をとらえる限り、70歳であろうが、あるいは80歳であろうが、人は青春にしてある。年を重ねるだけで人は老いるものではない。理想、希望を失うとき、初めて老いが来る。」と、サムエル・ウルマンは歌っております。

6. 沢田敏男先生と天皇陛下 —新春懇談会でのお話—

2009年1月23日に、沢田敏男先生に川上ダムの近況報告を兼ねて川上ダム建設所長や伊賀市青山支所長さんらと新春懇談会(写真-10)の場を設けさせていただく機会に恵まれた。



写真-10 新春懇談会 (2009年1月)

先生がこれまでに係わられたダム数は、220とのこと。ビールを飲みながらほぼ3時間にわたり、国内外のダム視察、指導の篤いお話に圧倒された。以下に述べる御製等をすらすらと披露される驚異的な記憶力にただただ驚かされるばかりであった。

以下に、前年に卒寿を迎えられた青年“沢田敏男先生”から若さを頂くとともに、その時の数ある話の中から児島湾干拓と深山ダムそれらにまつわる昭和天皇のお話、平成天皇への御進講について先生の言をもって紹介する。

① 児島湾干拓（淡水化事業）への指導

「軟弱地盤の調査のため、サンプリング用具として竹筒の内部をくり貫いて使用した。堤敷幅の広い緩勾配堤防で対応した。オランダの干拓堤防の視察や沈埋工法を勉強するため村山朔郎先生を尋ねた。…昭和31年、塩止め堤防完成時に昭和天皇が工事現場に行幸され次の御製を頂いた。」

「海原を せきし堤に たちて見れば

しほならぬうみに かわりつつあり」

② 深山ダム(アスファルトフェイシングダム)の指導

「深山ダムは、農水省関東農政局が那珂川に施工し、1968年着工、1973年（昭和48）に完成した灌漑・水道・揚水発電（最大出力675,000kW）を目的とした多目的ダム（上池は沼原ダム）である。堤高75.5m、堤頂長333.8m、総貯水容量2千5.8百万m³のアスファルトフェイシングの

フィルダムである。

昭和天皇が夏に那須の御用邸におみえになり、そして標高1,200mぐらいのところの沼原というところには高山植物がありますので、その高山植物を御観察にられました。ちょうどそのとき深山ダムが出来上がった直後で、次のような御製を頂いた。

昭和51年1月の歌会始に「坂」というお題でご披露されております。」

「ほのぐらき 林の中の 坂の道

のぼりつくせば ひろきダム見ゆ」

③ 平成天皇への御進講

「平成8年（1996）1月10日に、「フィルダム工学の進歩」というテーマで、天皇、皇后陛下にご進講させていただきました。（写真-11）

天皇陛下にその後拝謁したとき、『進講された沢田さんですね』と言うお言葉をいただき恐縮することがありますが、ダム工学者、科学者として、皇居にお召しいただきご進講させてもらうことは、誠に無上の栄光であります。」



講書始の儀における御進講(平成8年1月10日)

写真-11 平成天皇への御進講³⁾

7. 「文化勲章受賞記念碑」除幕式 —文化勲章受賞を讃える—

2009年11月28日に、伊賀市青山支所にて沢田敏男先生（90）の文化勲章受章を讃える「文化勲章受章記念碑」の除幕式が、関係者が集う中、式辞、経過報告の後、内保伊賀市長、亀井名張市長、猪上前町長他の発起人、そして先生のご

親戚、お孫さんによって除幕が行われた。筆者たちも記念碑除幕式への参加の榮譽に恵まれた。

記念碑は、写真-12に示す通りで、写真-13はその記念碑の前に立つ筆者たちである。

《記念碑文》

文化勲章受章

沢田敏男博士之記念碑

農は国のおもと
の大^{おおもと}本なり

水利は農のめいみやく
の命脈なり



写真-12 文化勲章受章記念碑

その時の感動を筆者なりに下記のように表現してみた。

- ・ 記念碑前で 郷土に感謝 卒寿翁
- ・ 水機構 頑張って下さいと握手され
卒寿翁に若さ頂く 除幕式



写真-13 記念碑前で

おわりに

筆者が、沢田敏男先生に初めてお会いするという幸運に恵まれたのは、水資源機構関西支社に勤務していた平成18（2006）年2月4日の文化勲章受章記念講演会の場である。

先に紹介したように、先生のご講演では、小学校、農学校という郷土の母校、その旧友、先生方、同窓生、そしてお母様への感謝を述べられている。

さらに、「結い」という助け合いの精神豊かな社会環境と自然環境とに恵まれた郷土に対して心から感謝されている。ご講演を拝聴して沢田先生は、まさに感謝の人という強烈な印象をもったことが鮮明に記憶に残っている。

その後、先生の故郷が水資源機構の建設する川上ダムのある伊賀市青山町であり、ことあるごと川上ダムに温かいご指導を頂いていたこともあり、平成21年1月23日に新春懇談会の場を設けた。

この懇談会で先生から直接お話をお聞きして、その博学と御製をすらすらとご披露される記憶力に驚愕させられた。同年の11月28日には、「文化勲章受賞記念碑」除幕式にも参加させて頂き、また伊賀から京都に帰る近鉄電車にてもご一緒させて頂いた。

連載「ダムをとりまく人物周航」では、数十名の著名なダム技術者とその功績や人柄について紹介してきたが、沢田敏男先生が唯一最初に筆者が警咳に触れてご指導を仰いだ大先生である。

ここに「感謝の人・沢田敏男先生」に深甚なる敬意と感謝をささげて本稿の筆を置く。

【参考図書他】

1. 「理性と感性の融合ー美しいダムと水環境づくりー」 沢田敏男：『大ダム』6月号, 1994
2. 「文化勲章を受章して」：沢田敏男氏文化勲章受章記念講演会（2006.2.4）
3. 「科学技術と芸術の融合」 沢田敏男：「風土工学10周年記念シンポジウム」（2018.9）